若 き 友 へ

2011 年 11 月 12 日
経済学部教授　髙島　均

所感 11－1　グアテマラ通信その 1 －小さな女の子－

ここアンティグアの街では、小さな子供たちも働いて生活を支えるのが当然とされている。9 年近く前、CFCA (Christian Foundation for Children and Aging) のスポンサーの一員として初めてグアテマラの地を踏んだとき、まだ母に手を引かれて終戦直後の横浜の町を歩いていた頃の忘れていた情景が甦ったのを覚えている。グアテマラの首都シウダード・デ・グアテマラの旧市街にあるカテドラル前の中央公園では、親が支える高く天に伸びた竿の先で小さな子が道化を演じていた。同じような情景を、野毛であったか伊勢崎町であったか、はたまた南京街の街角であったか忘れてしまったが、子供の頃に見たことがある。世界で最も美しい湖といわれているアティツラン湖の畔にある先住民の村サンチャゴ・アティツランを訪れたときは、ボートが近づいていくのを見つけた年端も行かぬ物売りの子供たちに取り囲まれ、どうにもならなくなり、再びボートに乗って沖に出、ボートの上で昼食をとったことを思い出す。村の教会では、民族衣装をぞんざいに着た母子が、夫と父を求めて、神に祈るというより泣き叫びながら神に助けを縋っていた。それは、すでに 36 年続いた内戦が終わって数年経っていた時であったが、内戦の悲劇はそこかしこに残り、むしろ、以前にも増した混乱と貧困と悲しみがあるだけだった。各地区の警察部隊は、部隊ごとに盗賊集団となっており、話をつけていた部隊の勢力範囲を少しでも外れると他の部隊の襲撃に会う状態だった。

それから 8 年以上の年月が経ち、薄暗く、崩れ落ちるようだった国際空港は、見違えるように明るく近代的な建物に変わり、街を走るスクラップ同然の車の列は、綺麗な車の洪水に変わり、雨のたびに泥んこになって壊れてしまった道路も、多くの箇所で舗装された山道に変わっていた。それと同時に、たくさんいた姫コンドルは減り、そこかしこに咲き乱れていた原種のダリアも減ってしまっていた。一雨降ると、地面に浸み込むことのできない雨水が、舗装された山道を一瞬にして急流に変えてしまっていた。世界の 3 大極貧国の一員であったグアテマラは、国連の分類では上位中所得国になった。それでも、国民の半数以上は貧困に喘いでおり、聖書にあるように、富める者はますます富み、貧しき者はますます貧しくなって、単に貧富の差が拡大しただけの話である。

この国では、10 歳を過ぎれば労働年齢人口になる。全国レベルの平均就学年数は 5 年半、地方だけで見れば 4 年に満たない。マヤやシンカなどの先住民族においては、平均修学年限は、都市部にお

いても 4 年半、地方では 3 年に満たない。ここアンティグアの街角には、あちこちで美しい民族衣装を着せられた小さな女の子たちが、富山の薬売りのように大きな風呂敷包みを背負って、手にはいくつもの民芸品を持って、縋るような目つきで観光客を追っている。

先日、近所の洗濯屋さんに頼んでいた洗濯物を取りに行った時、まだ 10 歳に満たないようないたいけな女の子が、美しい民族衣装に身を包み、大きな風呂敷包みを背負って、手には幾つもの品物を持って、洗濯屋さんのすぐ傍の角に立っているのを見つけました。あまりにも物悲しく美しい姿に、思わずしげしげと顔を見てしまいました。女の子は、私が品物を買ってくれるかも知れないと思ったのでしょう、私の後から縋るような目つきで品物を差し出しました。でも、私は、洗濯屋さんでお金を崩すための 100 ケツァル紙幣 1 枚しか持っていませんでした。女の子は、私が入った洗濯屋さんの格子戸に、縋るような目つきでしばらくしがみ付いていましたが、何時とはなく居なくなっていました。

憎たらしいほど世間ずれした子供たちもメルカドには沢山居ますが、いたいけな子供たちを見るにつけ、心が痛みます。